



年間第 25 主日 (ルカ 16:1-13△16:10-13)

イエスを得ようとして友を作ってきたか

「ある金持ちに一人の管理人がいた。この男が主人の財産を無駄使いしている、と、告げ口をする者があった。」(16・1) イエスのたとえ話の中に、神のあわれみをよく説明してくれるルカ福音書の中で「不正な人」が登場するのはこのこと「やもめと裁判官のたとえ」です。神のあわれみを説明するのに、不正な人をイエスが引き合いに出すということが、私には非常に興味深いです。

中村補佐司教様の叙階式、参加されたでしょうか？参列者があまりにも多くて、立錫の余地もないくらいでした。聖堂内に入ることができたとしても、通路や座席のさらに後ろで三時間立ちっぱなしでミサにあずかった人もいるそうです。それだけ期待されているということでしょうが、なかにはあっと驚くことをしてくれるのではないかと、半分怖いもの見たさでやって来た人もいるのではないかと思います。

すべてを種明かしすることはできませんが、叙階式ミサが終わって場所を移動し、祝賀会の中で中村倫明補佐司教様の本性が現れました。17年前に高見大司教様が補佐司教として司教叙階された際に余興で中村倫明当時の神父様が使った小道具を、今度はご自分の叙階式の祝賀会に持ってきていました。

私は、教区の牧者である司教の連続性と言いますか、継続性をそこに見た感じがしました。懐かしい太田尾小教区の皆さんも含め、たくさんの方が司教叙階式と祝賀会を盛り上げてくださったと思います。

中村補佐司教様の感謝の言葉を最後に聞くことができました。聖書の「宴会を催す時には」という場面を引用したあいさつでした。ちょうど9月1日、年間第二十二主日の朗読箇所です。聖書の中では、「貧しい人、体の不自由な人、足の不自由な人、目の見えない人を招きなさい」(ルカ 14・13)とあるのですが、中村補佐司教様はこれにヒントを得て、「実は私が、お返しのできない者なのです。お返しのできない人を招いてくださったのは皆さんなので、皆さんこそ、幸いな人々なのです」と結ばれたのです。とても印象深いあいさつでした。

私は、中村補佐司教様の導き方が、あのあいさつの中に込められているのかなあと感じました。教区で働く司祭、修道者、信徒が、誇りを持って働く。前を向いて働く。そのような気持ちにさせるために、補佐司教様は私たちに案内してくれるのだと思います。

さて今週の朗読に登場する不正な管理人は、素早い反応、主人をうならせるような行動を期待されています。「会計の報告を出しなさい。」(16・2) 期間はどれほどでしょうか。小教区の予算決算書の提出書類が届くのはおよそ三ヶ月前です。実際に予算決算書を作成するまでには二ヶ月しかないと考えべきです。

それからすると、このたとえ話に登場する管理人にも、二ヶ月程度しか時間の余裕はなかったかも知れません。この二ヶ月の間に、今後自

分が生きていけるような道を切り開かなければなりません。同時にそれは、これまで雇ってくれた主人をうならせるような画期的な方法である必要があります。主人をうならせるような方策でなければ、これまで主人にお世話になって生きていたるところに転がり込もうとしても、「主人に睨まれたら生きていけないので、あなたを迎え入れるわけにはいかない」とつれなくされることでしょう。

ここで管理人は抜け目のないやり方を考え、実行するわけですが、ここで私は中村補佐司教様のあいさつで触れた聖書の捉え方を思い出しました。宴会を催す時、お返しのできない人を招きなさいとイエスが言われ、そのお返しのできない人に、まったく思いつきもしない視点を紹介してくれました。お返しのできない人とは、今日司教叙階を受けた中村補佐司教様だという視点でした。

私も同じようなことを考えます。イエスは今週のたとえ話の中で次のように言いました。「そこで、わたしは言うておくが、不正にまみれた富で友達を作りなさい。そうしておけば、金がなくなったとき、あなたがたは永遠の住まいに迎え入れてもらえる。」(16・9)

私たちが永遠の住まいに迎え入れてくれる「友」とは誰のことでしょうか。主人に油を納めている小作人でしょうか。小麦を納めている小作人でしょうか。むしろ、それらを通して何とも抜け目のない奴だと褒めた主人の心が、管理人が生きていくことを可能にする唯一の「友」なのではないでしょうか。どこに行っても主人の息がかかっています。その中で生きていける方策を、短期間で不正な管理人は考えたのです。

私たちも、いざという時、短期間で永遠の住まいに迎え入れてもらえる方策を考えなければなりません。それは同時に、父なる神をうならせるものでなければなりません。どんな方策が両方を満たすでしょうか。私は、「イエスを友とする方策」これ以外に答えはないと思うのです。

「不正にまみれた富で友達を作りなさい。」友達を作っても、この世界のどこにも父なる神の息のかかかっていない場所はないのです。ですから自分が出会う人を友達とする中で、その都度イエスという「友」を作るようにしなければならぬということです。あなたは多少なりとも「友」を作ってきたでしょう。その友との間に、イエスを手に入れてきたでしょう。これが「不正にまみれた富で友達を作りなさい」という呼びかけの唯一の解答なのだと思います。

この世の出会いには変化し、移ろいやすいものです。長く続かない友人もいるかも知れない。仲良くなった時の何倍も憎み合って別れるかも知れない。けれども、いずれの友を得ようとした時でも、友を通してイエスを得ようとしてきたでしょう。イエスを得ようとしてきた出会いであれば、この世ではまったく不毛だった友でも、天の国に迎えられる根拠に選ばれるかも知れないのです。

イエスを得ようとして出会った友が、私たちが永遠の住まいに迎え入れてくれるのであれば、この世でどんな結末を迎えようとも、感謝できる出会いに違いありません。